kunio tsuji

辻邦生

les cahiers de paris

パリの手記

Ⅳ

le cap et la révélation

岬そして啓示

辻邦生

パリの手記

Ⅳ

岬そして啓示

河出書房新社

パリの手記
Ⅳ

岬そして啓示
© kunio tsuji 1974

著者 ―――― 辻邦生
発行者 ―――― 中島隆之
発行所 ―――― 河出書房新社
東京都千代田区神田小川町 3—6
電話 東京 292・3711
振替 東京 10802
印刷 ―――― 中央精版
製本 ―――― 大口製本

初版発行 ―――― 1974年2月28日
再版発行 ―――― 1974年4月30日

定価は函・帯に表示してあります
乱丁・落丁本はお取替えいたします

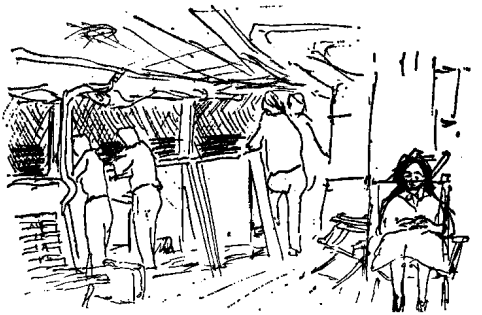
岬そして啓示

パリの手記 IV

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

〔一九五九年〕八月二十二日　ブリンディシ港　甲板にて

朝以来日射病にやられ、日のあるうち税関の日陰で、海から吹いて来る風に当っていた。これほど身体が参っているとは信じられなかった。もう学生と同じような旅を続けられない程身体が衰えたのか。それともただ弁当が悪くなっていたせいか。しかしとも角、この不意打ちは僕らにとってよい教訓になった。無謀とは云わないまでも、冒険のもつロマンティックな面を反省させてはくれたのである。いかにそれが冒険であっても、この世の、さまざまな絆を解きはなつことはできないのだ。疲れにほうけたようになって、肌の冷たくなるような海の風に吹かれ、二台連絡トラックから荷を積みあげているのをながめていた。白い二千トンのギリシア船が横づけになり、ヒューヒューと機械が唸り、ロープが下り、クレーンが回転する。鷗がとび、帆を張った船が走るが、それらは、衰えた肉体と直接の関係をもたないもののように見える。五時に乗船、デッキ・チェアにもたれ、うとうとし、夕日が赤くなった六時半ころは、ようやく気力が戻ってきた。頭痛はなかったが、気の滅入るような吐き気と、便通のゆるんでゆく脱力感が、眼の前の白くなる貧血と一緒に襲ってきた。夜十時四十分、汽笛がなる。エンジンの震え。静かに岸壁が遠くなる。一米の幅が岸壁との間にあき、スクリューの逆回転で川のように波が逆巻き、船が後退しながら岸壁をはなれてゆく。黒いねっとりした波。町々の暗い灯り。二本の石柱が古代のそれのように照明されている。その灯も小さく、鈴のように連なり、水面が黒く拡がりはじめる。スクリューの波を起す音が泡立つようにきこえてくる。Aと二人、後甲板にもたれてみている。パイロット船が赤ランプをマストにゆら



しながら遠ざかる。船はイタリアを離れ、アドリア海に出た。甲板は出航に興奮した人々が、甲板を歩きまわり、舷側にもたれて話し合い、何とない賑かさだ。十一時。／外海に出たらしいうねりが大きく伝わってくる。

八月二十三日　イタカを望みながら　甲板にて

疲れているが、よく休むようにしているので、元気だ。一眠りして起きると、Aが向うの甲板から歩いてくる。「こんな青い海をみたことなかった」といっている。波は穏やかで、船は殆ど動揺せずに動いている。貧しいコルフを出てからデッキ・パセンジャーの数が急にふえた。貧しい服装。きたない荷物の間を、子供たちが動きまわっている。そのみすぼらしい子供の顔が、浅黒く、はっきりした輪郭で、薄青いかげをもった大きな黒い眼をしていたりする。セメントの袋にとうもろこしを入れ、カゴに布を縫いつけて持ち運びに便利にしている。疲れはじめた乗客も、ベンチや甲板の荷物の間にごろごろしている。コルフに降りたとき時計をギリシア時間に合わしておくのを忘れた。それで町のエストラパードで一時間もねて、ミュゼを見て船に帰ったら、汽笛を三度もならして僕らを待っている。船に辿りつくと、出航時間になっている旨を知らされる。／……この青い波は非常に透明で、舳先に分けられた大きなうねりが白い泡を吹きあげながら、その青い波の上を走ってゆく。右にアルバニアを見、左にイオニア諸島が次々に現われる。甲板の寝椅子にもたれ、自由な思いにふけりながら、海の微風にふかれているのはいい気持だ。そしておそらくこれが亡命の旅であっても、この爽やかな自由な心には変りないと思われる。トーマス・マンの『ドン・キホーテと海を渡る』を引合いにだすまでもなく、自然に直面した人間たちが、もっとも人間的な感情を目覚めさせるのだ。僕はしかし身体の条件はとも角として、この巨匠がアメリカへの旅に持っていった世界文学の巨大な空間に、圧倒されるような気がする。端正な意志的なマンが、そのようにし

て市民への敬意を失わなかった態度の後側に、この巨大な空間が横たわっていたことを思うと、その「存在」がいかに窮極の問題であるかという気がする。おそらく〈存在〉こそ現在では小説家の最大の問題でなければならない。そしてその〈存在〉とはその全くの個性を表わし、それが普遍の高さに達するまで深化するとき、はじめて、それは人間にとって貴重な魅惑的な形となる。多くを書くということも、その一つ一つが、以上のような意味の個となりえたなら、十分に意味がある。しかし最も重要なことは、その状況のなかから、その状況を最もよく語る「個」をとりだして、この「個」にすべてを与えることである。多くの凡庸な人々が、よく書けはするが描写の平面に閉ざされ、そこから突きぬけることができないのは、おそらくこのためだろう。つきぬける、描写の平面を出るというのは、〈存在〉に達することを意味し、そこに何らの説明を見出しえないような状態にすることを意味する。例えばある美術館を見てまわるとする。そこに無数の作品が並べられているとする。学問的な方法は、何らの主観的感情をまじえずに、一つ一つ、丹念に、正確に書いてゆかなければならない。しかし芸術的方法は、これとは全く異なる。その一つ、または幾つかが、僕なら僕がそこに感じたすべてを物語るように、取りあげられ、それをとりまくもっともヴィヴィドなエピソードと、それが「個」となるための徹底した展開をもって、語られねばならない。これは報道の方法とも異なる。報道においては主観は稀薄で、事実を伝えるという第一の使命がある。態度としては学問的なものの一支流であるべきだ。しかし芸術的方法の主観性は、いわばその世界の現われる動機のようなものだ。それは伝達ではない。それはある世界の存在の表われである。この世の秩序から出、いかなる意味であろうと、そこに立ちかえることで、生命を蘇らせるそのような世界である。それは人間が人間となるための空間である。主観とはまさにその故に死の無限の体系のなかの目覚めとなる。この目覚めが客観の歪曲という冒険から、人間である徴しに高まるとき、

それは客観を呼びおこすものとなる。したがって、その世界を担う「個」は「人間が人間となるための」本質的な偏愛、むしろ愛そのものによって「生れたもの」といっていいだろう。この「個」が考えうるかぎりの正確さと深さと生きいきした感動によって把えられ、造型されるならば、その時、描写の平面がこえられるのだ。描写の平面とは、この「個」に惑溺することのない状態から生れる。情緒にせよ、雰囲気にせよ、単なる「多」を漠然と感じるにすぎない。あれもこれも中途半端に集められているのだ。ヘミングウェイのいう「感情を喚起する装置」としての「個」は、逆の、より文学的な意味で、同じこの「偏愛」の別の面を云いあらわしている。／多くの船客のなかから僕の注意をひくのは、イギリス人らしいオールドミスの姉妹、女四人男二人の若い学生のグループ、それにひたいにアザのある女の子をつれたギリシア女、大声でしゃべる肥った黒眼鏡のギリシア女、同じ左眼の下に傷あとのある、眼のうるみ出た、だらしのないギリシアの若い女等々である。そして不思議なことは、僕もAも、健康的にも年齢的にも、そしておそらく精神的にも、このようなデッキの旅をする若人や貧しい人々から徐々に離れつつあるのを感じる一方、こうした人々へのある憧憬が生れるということだ。決してきれいでも素敵でもない一群の若人は、ただそれだけで美しく、潑溂として、僕に、「永遠の青春」という彫像を刻ませたいと思わせるほどだ。それは潮が押寄せてくるように、「若さ」のすばらしい彫像にみちてすぎてゆく。彼らもその美しさ——真の美しさ——には気がつくまい。こうして役の終った俳優が化粧を落し、そこから立ち去ってゆくように、彼らも「若さ」を通りぬけ、通りすぎ、遠ざかってゆく。悩みとよろこびの影が、雨と光のように交錯して彼らの魂を育んでゆく間に、「若さ」が宿っているのかも知れない。そして彼らが立ち去った後に、また一団の「若さ」を担った人々がくる。しかしその美しさ、みずみずしさ、その輝かしさは、立ち去っていった人々のそれと同じように、「永遠の青春」の刻印をあらわしているのだ。

バルベックの海辺にニンフの群のように描かれた乙女たちは、プルーストのこうした永遠の映像を見事に造型したものだ。パリでよく会う老女の一人に、頬紅をさし、白粉をぬり、お嬢さま然とした旧式の洋服をきたのがいる。同じうす茶の細い日傘をもち、昨日と同じように今日も歩いている。永遠の若さの中に取り残されようとし、外形だけにそうした骸が残って、肉体は衰え、精神的には荒廃して、ただグロテスクな形だけとなる。大切なことは、最も見事な充実をもってその「時」を通りすぎることである。「若さ」から決定的にしかし決意をもって離れることである。熟した実がそうであるように、新しい「時」に充されるために、「若さ」から決定的に遠ざかることである。それは〈存在〉としてすでにそうでなければならない。その時にはじめて僕はこの「若さ」を永遠のものとして、すべての人々がそこに来たり、そこをすぎてゆく影像を造型することができるだろう。しかしまたギリシアもそうした人間の歴史の「永遠の若さ」の表現ではなかったか。人類はそこに達し、そこをすぎてゆく。しかしギリシアは余りにも完璧にこの若さを表現した。それはそれ故に「永遠の若さ」となったのだ。おそらくその故に僕らを含めてかくも多くの人々がギリシアへの船に乗りこんだのだろう。今左舷に近く、灰褐色の岩肌を日に灼かれたギリシアの地が見える。切り立った崖が、僅かに黒ずんだ木をまぶした露わな岩肌のまま、青く、黒ずんでみえる青い海に切れこんでいる。断崖の上はオリーヴ畑か果樹園らしく、日に霞む青いヴェールの中で色を弱めている。(五時十五分) 右舷に岩に灌木が匐っている島が近づく。かなり大きく、山の傾斜は急で、海に落ちこんでいる。幾つもの谷が切れこみ、雨に穿たれたあとが乾いた沢になって白褐色に見える。西日が当っていたが、島かげに入ったので、海の色も灰青色に変り、ねっとりとした重い油のような滑らかな水面に変った。島全体は疎らな灌木に覆われ、岩の地肌が白くすけてみえる。この島がユリシーズのイタカである。アポロドロスによれば、トロイから帰ったユリシーズの船が、丁

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

度、こうしてイタカの島に近づき、すでに自分たちの町の煙をのぞむ距離になって、ユリシーズがもっていた風の袋（アイオロスがユリシーズに与えた袋のうち、順風の袋を開いてイタカまで帰りついたのだが）を黄金の袋と勘ちがいした部下たちが、暴風の袋をあけ、そこから本もののユリシーズの航海がはじまるわけである。十分ほどの短い碇泊ののち、船はまた細い地峡のように入りこんだ入江を逆行している。イタカの町はほとんど新しく、赤屋根に、白壁の家が一握りほど並んでいるだけだ。町の後にオリーヴの段々畑が迫りあがっている。海岸通りを、小さく、馬車が走っている。糸杉が黒い羽根を立てたように地面に垂直にたっている。沈んでゆく最後の光が島を夕日の色に染める。／食後、船首に立って、ひゅうひゅうと吹きつけるイオニア海の風を受けていた。Aの髪がなびき、夕映えのなかに眼を細め額が秀でている。海がぶどう酒色に染まり、やがて暗い色に変る。イタカを出てしばらくしてサミの港に入る。喧騒の音をたてて子供たちが梨やいちじくを手籠にいっぱいかかえて売りに入ってくる。デッキにあふれる人の間をとぶようにして声をはりあげる。二ドラクマで買ったいちじくは甘く、舌にとけた。島の間を航行してふたたび出航。夜はアテネの地図を調べる。／前甲板の貧しい人々。鶏を生きたまま束ねて乗りこんでくる農民たち。

八月二十四日　アテネ・アカデミア街

アクロポリスとは何か。おそらく誰しもその定義を心のなかに用意しようとするだろう。むろんそれはそれでよい。しかしそこにはどのような説明もが到達できない何かがあるような気がする。今日の目覚めからほとんど続けさまに、僕はギリシアの自然の荒涼とした姿に驚いていたのだ。それは何とも説明のできぬ驚きで、それはおそらく僕が日本およびフランス、またせいぜいイタリアの風土を前提にしていたためだったかと思う。それは意表をついた驚きであり、期待を裏切りあらゆる予想に肩すかしをくわせるものであった。この暑熱にじりじりと灼きつけられ、岩と砂が白く乾きあがり、あるものといっては疎らに覆う灌木の埃りにまみれた姿ぐらいだ。草も木も、この灼けつく太陽に乾しあげられ、粉をふきそうに乾いた岩の間に死んでいたりするのだ。それは自然の強暴な意志が、あまりにも支配者の顔をあらわにする。僕はそれの類比をただあのエジプトとアラビアとの砂漠に見るだけだ。しかしあの砂漠にごうごうと見えない意志のように吹く風を僕は何と感じたであろうか。それはほとんど自然が自然のままであらわれ、あらゆる人間の営みを拒否した「虚無」の空間を示しているということだった。しかしそれとこのギリシアの太陽に灼かれた不毛の大地と本質的にどこが違うのか。今日はアクロポリスの丘の上に強烈な光が照りつけていたが、しかし風もまたごうごうと吹きつけていたのだ。岩は乾き、埃りにまみれた乏しい草木は石の間にふるえていた。海はたしかに近く、暑気にかすむ彼方に、それと指呼することはできた。しかしこの厳しさは、この自然の強烈な意志は、ほとんど人間の営みを拒否するかに思われた。そして今朝

以来僕はこの厳しい自然の拒絶を、果してギリシアの母胎と等しく見ることができるのだろうかと危惧しつづけたのだった。自然の恩恵こそはギリシアを見る以前、アラビアの砂漠を見る以前、人間の存在の条件として僕のなかに予想されたものだった。すなわち人間がそこに住む以上、人間にふさわしい環境でなければならないと考えていたのだ。しかしそれは全くの誤りであることを、今日のこの、アクロポリスを見た瞬間ほどに思い知らされたことはない。それはいわば一つのある歓喜をともなった理解であり、あるふるえるような感動であった。しかしその瞬間に、僕は自分が考え、自分によって把えることのできなかったある実体を確実につかんでいたのがわかった。その窮極にあるものとはこの遠く嶮しい岩山の上に端然と立つアクロポリスの姿であったのが、そしてそれが、与えられた自然の意志に抗し、人間の領域を切りひらき、「人間」をして「人間」とせしめた人間の意志を表わしているのが、僕には痛いように分かったのだった。バスの窓から近くなり、いよいよ嶮しく灰褐色に露出する岩山をながめつづけながら僕はその他のことは何も思えなかった。そこにあるということで十分なのは自然だけだろう。だがここには、それを見、それを味わうというだけでは足りない何かがある。それは人間を人間の根源の存在にまでつれもどす。あまりに強烈な自然に対して、それは人間を不毛にすると叫ぶことが許されないのを、これほど明瞭に語るものはない。それはまさしく運命に抗い運命にうちかつ姿そのものだ。そしてアクロポリスをみていると、逆にこの厳しさがなければ、あのように美しく、均整のある、典雅な、若々しい、規律ある、勁い、形態をつくりあげることができなかったろうと思われた。それは実にすっきりと胸の奥底に落着いてくる納得深い実感だった。青い空に、その廃墟の丘の石柱は美しい彫りのかげをきざんで太く、しかしある軽い自然らしい優雅さで立っていた。アテナ神殿、カリアティードの美しさ、アクロポリスの長方形の姿は、いやになるほど写真でみせられたものだった。しかしそのどれもが僕

にそのようなものは説明してくれなかった。あらい大理石の半透明にすらみえる乳白色にわずかに卵色、薄褐色の感じられる肌にさわったとき、これは「男」の作品であることをある共感をもって思わないわけにゆかなかった。それはあらゆる自然に対して、人間をまもり、人間をきずきあげた文明の姿だ。自然の強暴な意志は、それによってのみ文明がつくられる、動因のようなものだと感じないわけにゆかないのだ。つまり、等しく課せられたその強暴さに打ちかって、打ちかつことのできた民族だけが、この文明を築くという仕事に進めるのかも知れない。まさしくそうにちがいなかった。それはこの永遠のドラマのもっとも見事な典型化ですらあるのだ。あの荒々しさに、あの典雅さは、何と悪びれず、自然の匂やかな規律と明確さをもって、均衡しているのだろう。アラビアの砂漠が生んだのは、地中海のもう一つの文化であり、同じようにしてヨーロッパの運命をかえた。そしてこれもまた自らに打ちかってのみ文明に達しうるよい例であるかも知れない。／オベルジュに十時半着、休んですぐビザンチン教会をめぐり、後バスでアクロポリスの入口に到り、ハドリアヌスの劇場（ヒポドローム）、ポルティック・アンティック、バッカスの劇場を見疲れ、八時半に帰る。（九時二十分）今日みたアクロポリス美術館のアルカイックの立像、フロントンの美事さは忘れがたい。彩色がかなりはっきり残っているのをみておどろく。古典期のアクロポリス神殿フリーズのあの優雅な、いうにいわれぬ美しさには、身体がふるえてくる。とくにサンダルをぬぐニケ（これはニケの神殿のもの）の美しさは、言語に絶する。その衣のひだの表現の繊細さ、女体の匂やかな清々しい線、豊かな胸、片足をあげた動き、この世の極みのような美しさには、魂の底までふるえた。アクロポリスの丘のまわりには現代アテネのおよそ無意味な町々が拡がり、廃墟がその間に見られ、疎らな樹木の地肌の白褐色にみえる山が波うって、エイナ湾がかすんでいた。

八月二十五日　アテネ・アカデミア街

昨夜は久々にベッドのうえでよくねむった。しかし想像以上に疲れているうえに、昨日はアテネに着いた興奮にかられて、歩きまわりすぎたようだ。今日はAが朝から下痢、午前中はビザンチン美術館にゆくが、午後はずっと寝ていた。僕も頭痛がとれず、そのうえ吹き通しに吹く強風と到るところでやっている道路工事と建築の土埃りとで、不快この上ない。もうどこへゆくのもいやになってオベルジュのベッドの上にねていた。要は、長旅のどうしようもない疲れというほかない。夜わずかに、イルミネーションの上に、照明されたパルテノンを見る。しかし所詮見るということは、はじめの見るという行為と圧倒的な内容には及ばず、いわんや貧しい、黄色くなったパルテノンは、昼間の模型でしかないのだ。／自然のはげしさというが、考えてみれば、光の乏しいパリの冬も、とうてい人間の住みうる場所ではない。これより北のロンドン、ベルリンなどはもっとそうだろう。そのような直接的風土に関する素朴な感傷、それとのみ結ばれる関係は、何ら文明に関するものではない。もっと深く、もっと本質的に、文明は、人間がそうしようとする意志に関係している。問題なのはこの意志の力であり、人間たろうとする意志だけが人間を人間にするのである。それは与えられた自然がどのように峻厳であっても、またどのように柔和であっても、それとこれとは直接的な関係はない。その「自然」はいわば人間の運命の外貌となり、それに対して人間がこえようと計る何者かとなる。文明とは自然のままに、レセ・フェールに投げだされたものから生れたのではなく、人間たろうとする不断の戦いから生れ、その不断の意志が保つ空間を文明の空間と呼ぶのだ。

それらは与えられ、単に受けるというものではない。それは創ることであり、生きることである。それは人間を中心に緊密に結びついた求心的世界である。パリもまた今の美しさ、今の生活の快適さを得るには、与えられてそうなったのではない。ギリシア人もこの不毛の、しかしあくまで明るく透明で爽やかな風土を、みずから愛するものへと変えていった。それは劇場(オデオン)をみても、ポルティック・アンティック、バッカス劇場をみても、おそらく夏の爽やかな、全く雨のない日々、夜々に、人間の、人間であるための、「ドラマ」を心から愛した人々を思わないではいられない理由である。しかし疲れると、とかく自らを許しすぎたり、きびしすぎたりする。今必要なのは、もっとも適当な寛容である。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com